

町長短信

「お正月に感じたこと」

元旦は、西方地区の「水かけまつり」にお邪魔をいたしました。
今年は久しぶりに新婚のご家庭を「やど」にした行事進行を拝見いたしました。
杯を重ねるごとに和やかに、そして熱を帯びて参ります。視界を遮っていたカーテンが開けられると、そこにはたくさんのカメラマンたちが待機していました。
満を持して、若者たちは表に飛び出していきます。
そこから先は、新聞テレビで報道されているとおり、今年も恒例行事がつつがなく執り行われました。
さて、西方地区では、翌2日にも「悪魔払い」行事が控えていると伺いました。
地区外の人間から見れば、安易に「お正月なのに大変ですね」と言いたくなるどころですし、地区の方も「忙しい」「後継者がいない」とおっしゃいます。
地域の行事を持続させるには、関係者の大変な努力が陰にあることを忘れてはなりません。
少子高齢化がさらに進展すれば、地域の伝統行事は存続の危機にさらされます。
お金で解決する問題とも思えません。
ただ、地域の伝統行事に、当事者として参加し行事の進行を担った経験は生涯生き続けます。この体験が遠く離れても郷土愛を育み、地域を支えているのです。
伝統行事に限らず、何を残し、何を諦めるのか、そして後世にどう伝えていくのか議論を深めていければと思います。

歴民コラム 西方前遺跡出土土偶

あごを少し前に突き出して、ツンとした顔立ちの愛らしい形をしているこの土偶は、今から2,300年前の縄文時代晩期の終わり頃に作られたと考えられています。発掘された場所は、三春ダム下流の西方地区で、ここは縄文時代の中期から弥生時代にかけて大きな集落がありました。

土偶は、手や足など、どこか欠けていることが多く、祭祀などの際に厄災を祓うことを目的に、故意に壊したとも考えられています。また、乳房や妊婦を表現した女性像が多いことも特徴です。このことから、安産や豊



出土当時のようす
(土偶はどこにあるかな?)



西方前遺跡出土土偶

穰、生命の再生にかかわるお守りといった用途として使われたと考えられています。未だにはっきりしたことはわかってはいませんが、

西方前遺跡から出土したこの土偶、足のように見える部分は実は両腕を表しています。胴体は上半身のみが現存し、下半身は失われています。頭部から腕にかけて約20センチあり、同時期の土偶の中でも類を見ないほどの大きさなので、もし全身が残っていたら、かなりの大きさであったことが想像されます。どんな願いが込められて作られたのでしょうか、思い巡らせてみるのも一興です。

町の指定文化財にもなっている西方前遺跡出土土偶等は、資料館常設展示室でご覧いただけます。

問い合わせ先 歴史民俗資料館 ☎ 62-5263 FAX 62-6953

人事異動のお知らせ

右記のとおりお知らせいたします。

※ () 内は前職

退職 <1月8日付> 影山明男 (住民課長)

異動 <1月9日付> 住民課長 遠藤信行 (三春町土地改良区派遣)

産業課長兼土地改良区派遣 永山晋 (産業課長)